

辻仲康伸（監修）

大腸肛門病ハンドブック

土屋周二

前・横浜市大名誉教授・外科学第2外科

本書は簡便なガイドブックというより、この分野の全体を網羅した成書である。ご承知のように大腸と肛門は密接な関係があり、この両者を一体とした知識と技術をもとにした専門的な医療が求められる。近代、欧米ではそのような視点から水準の高い施設がつくられていったが、わが国では少し遅れ1970～80年代ごろから各地にセンター的施設が創設され、優れた実績を挙げている。またオーストラリア、アジア諸国地域にも欧米の一流施設に比肩するものができ、その水準も高い。有名なGoligherの名著は既に1961年に刊行されたが、その後世代が代わり、内容を新たにした成書が内外で次々に発刊されている。

本書監修者の辻仲康伸氏は外科、特に大腸肛門病について修練と研究を積み、評者の現職時代には大変に教えられるところが多かった。そして高い志を持って大腸肛門病専門の施設を開設されたのである。約20年が経過した現在では大規模な真の意味での大腸肛門病センターとなり、多数のエキスパートと共に活動されている。

本書の一つの特徴として多数の執

筆者がかかわっているにもかかわらず、記述に不統一性がないことが挙げられる。主要部分は辻仲氏自身が直接執筆され、他の部分は辻仲病院にスタッフとして集っているエキスパートによるものであるが、監修者の理念や思考がすべてに行き渡っている。また治療効果の評価や適応の選択などは豊富な自験例による検証がなされており、あいまいさがない。一方、局所解剖、内視鏡検査、MRIその他画像診断などについてはわが国の名だたる専門家が担当され、斬新な知識を惜しみなく提供されているのは心強い。本書の序文には、この教科書のゴールは臨床で活躍する外科医、消化器科医、肛門科医の方々の日々の疑問を解き、大腸肛門病の専門医を志す若手医師には正しい指針を示すことである旨が述べられているが、この目的に十分合致していると思う。

全体として記述は明解で、図表、写真は豊富でこの上なく鮮明である。各章は旧来の成書にみられた一般的な事項の羅列とは異なり、重要な点を余さずはっきりと示しており、実際に診療を進めるために役立つ場合が多いだろうと思う。新しい視点か

ら他の大腸疾患では機能性疾患などについても解説し、余すところはない。

症例が多い肛門疾患についてはかなり重点が置かれ、現在行われている有用な治療方法について詳述されており、さらに最新の方法も批判的な視点を含めて紹介されている。専門家の陥りやすい独善性や執着のようなものではなく、辻仲氏の進取の気象や優れた判断力が随所に垣間見られ感慨深いものがあった。

辻仲氏は国際的にも活躍されているが、親交のある米国の指導的専門学者、S. D. Wexner教授が現時点での大腸肛門病学の問題点や展望を述べた章は貴重である。辻仲氏自身もまた、序論でこの方面の医学の沿革と展望を詳しく示しており、ある種の意気込みが感ぜられるのは評者だけではあるまい。

本書は大腸肛門病学を志す方、これに関心のある方の座右の書としてぜひお勧めしたい。

●B5/頁 392/2011年/定価 12,600円
(本体 12,000円+税 5%)

[ISBN978-4-260-01342-0]

医学書院 刊